

---

# 月光城の魔法演義

シャロク坊主

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月光城の魔法演義

### 【Nコード】

N2498Q

### 【作者名】

シャロク坊主

### 【あらすじ】

月曜日は憂鬱だから、お昼寝をして夢の世界に旅立とう。魔法使いのシオと共に、小夜「イヴ」は夢の中を廻り歩く。現実よりも理不尽で、夕焼けよりも幻想的で、愛ある日々より滑稽な。切なくしみるファンタジーの中のファンタジー。

## 零 月光飛行

零

夢を見た。

闇夜に白く浮かび上がる月。私は浮かれて宙を駆けた。重力はない。真新しい革のサンダルは空気ですら足場にする。雲の冷たさ。肌を撫でる風のやさしさ。光の色の妖精たちが視界の端に現れては消えていく。笑う蜚。私も笑った。笑うたびに、不安になって月を見た。

よかった。まだ、ちゃんとある。

どうして失くすことを怖がっているのだろう。月がなくなること。落ちることも、飛べなくなることも、考えてすらいなかったのに。世界の方が疑うに容易い。高度を増していく空の中。私は少しづつ不安になっていく。

夢の中でも空気がなければ死ぬのだろうか。

姿も知らぬイカロスは熱のせいで死んだ。私は熱などなくても飛べる。でも、息をしているのかどうか、よくわからない。

夢だもの。

肺が膨らむ感触なんて、重力よりも厄介な楔。

なのに私はそれを求める。求めに求めて、とうとう下を向いてしまふ。月を自分の、視界から外す。

その途端に、消えてしまったのかもしれない。

湖面に映る偽の月。傍らにはシンと冷えた青白い城があった。絵本の中のお城のような、ひび割れのない白い壁。高い窓。そして、青く尖った不吉な屋根。

このまま落ちていけば。私はあの屋根に突き刺さって、死ぬ。

サンダルはとくに脱げてしまった。風はやらしくなくなつて、肌を突き刺すようにぶつかってくる。痛い。暗い。雲の中。いつし

か私は、目を閉じて、全てを消そうと試みた。

衝撃。

死んだ私は安堵した。

目を閉じたって、世界はある。

だから 月だって、きつとある。

瞼を開けることはできないけれど。それももう、いいのだ。

気付いてしまった。

私は最初の最初から、お城の屋根に突き刺さって死んでいたのだから。

## 一 鏡の奥の無限城

### 一 鏡の奥の無限城

月曜日は憂鬱だともう何年も毎週毎週思ってきたので、いい加減に飽きてきた。この憂鬱さを受け止めて、何か明るく楽しい方向に発展解消する必要がある。それが進歩というものだ。

「だからって、放課後に残って何をするの？」と彼は訊いた。

名前は由比ヶ浜シオ。痩せてはいるが背は高い。ネコ科の肉食獣のような顔つきをしていて、二重まぶたの目を細めているときと丸めているときで、ずいぶんと受ける感じが違う。今は細めているので、機嫌がいいらしい。にこにここと楽しそうに私を見つめている。椅子に逆さに座って背もたれに肘を乗つけた彼は、制服のブレザーがよく似合う。おおよそ、制服と名のつくものならなんだって似合うだろう。学校服だろうと、葬式服だろうと。

「それは……これから考えるの」

私の頭にはなんの案も詰まっていなかった。ノープランのないものねだりだ。

「なるほど」とシオは頷く。

「僕に芸でもさせて、退屈を紛らわせようと言うんだね？」

うん、それもいいかもしれない。

「芸をしてくれるの？」

「タダじゃ嫌だな」とシオは笑った。「安売りしてたら身が持たないからね」

「ケチだな」と私は言った。心からのセリフではなかった。まあそうだろうな、タダで何かしてもらえるような間柄ではないと思いなから言ったので、なんだか無機質で棒読みなセリフになってしまった。

「人間は往々にして調子に乗るからね」シオの口調には陰が入った。

目を少し見開いて、でも口元は笑ったままだ。

「おとぎ話の悪魔は理不尽な対価を求めらるう？ あれはただの保身なんだ。なんでもしてくれる奴と思われたらお終いなさ。イヴちゃん、悪魔は、安くない」

私の名前は小夜だ。でもシオは私を、二人きりのときは、イヴと呼ぶ。彼は勝手に名前を付ける。人だけじゃない。物であろうと、場所であろうと。なんだって自分の呼びたいように呼んでいる。

そうしないと、魔法がうまく使えないのだそうだ。

「なら」と私は言った。「何かあげてもいいよ」

「なんでもいいの？」

「なんでもいいよ」

私には、人にあげられるような大事なものもない代わりに、失って困るものもない。せいぜい、お金ぐらいだろうか。でもそれは誰だつてそうだ。特別なものではない。

「そうだな。今夜君の夢の中に入ってもいい？」

シオはいつもと同じ、ちょっとそこまでジューズを買いに行くような口調でそう言った。

「夢の中に、入れるの？」と私は訊いた。これまた棒読みになつてしまった。そりゃあ、入れるから求めているのだらう。シオはあまり嘘をつかない。つく必要がないし、たぶんその気になればなんだつてできるから、嘘にならない。

「入れる」

ほらね。

「僕は他人の夢を覗くのが好きなんだ。それも、できうるなら可愛い女の子の夢がいい。ふわふわした、ステキなもの以外は何も無いような夢がいい」

「いいよ」と言う私は、口を綻ばせてしまった。

私の夢に入ったら、シオはがっかりするだらう。骨折り損のくたびれ儲けだ。

「いちおう、説明責任があると思うから、言うけど」とシオは言っ

た。「夢の中に入るのって、けっこう大事なんだよ。極端なことを言えば、僕のせいで君の性格が変わってしまうことだってある。明日には極悪非道の万引き犯になっているかもしれない。それでもいいの?」

「いいよ」と私は言った。

明日の私が変わるのなら、変わった私は自分のことを変とは思わないだろう。ああ、そうか、シオを夢の中に迎え入れたから変わったしまったんだなと思うだけだ。

少なくとも、今の私は、そういう人間だ。

「そう」とシオは目を見開いた。「君はよっぽど退屈なんだね、イヴ」

「そうかもね」と私は頷く。

黒板には綺麗に雑巾がかけられている。時計は一分ほど正確にずれていて、授業の終わり際の私たちをいつも失望へと導いてくれる。掲示板には当番表。大きくてしっかりした手ざわりのある文字の中に、私の名前もちゃんとある。

シオの名前もちゃんとある。

不思議だと思った。

四十組のイスと机。ホコリもあればゴミもある。傷もあれば臭いもある世界なんて。

そんな場所に、息を吸って、息を吐いて。きちんと存在しているなんて。

とても不思議でうんざりだ。

「シオ」私は言った。

「私の夢に入れてあげるから、今すぐ魔法で、眠らせて」

「それでいいの?」とシオは片眉をあげた。「なんだか拍子抜けだな」

「いいの」私は机の上につ伏して、目を閉じた。「これから、月曜日になったら、毎週夢を見ましようよ」

「そうじゃない」とシオは言った。

立ち上がったって、歩いてくるのが音と気配でわかる。

私の頭に、そっと手を置く。

「イヴ、顔を上げるんだ」

「どうして？」

「目と目を合わせないと、僕が夢に入れない」

私は少し迷って、言われたとおりに顔を上げる。

なぜ迷ったのだろうと、不思議に思う。

「それはね」とシオは言う。

「君は僕が怖いんだ」

シオの澄んだ右目に、目をとろりとさせた私の顔が映っている。

すごいな、もうこんなに眠くなってるんだ、私。

「そっちじゃない」とシオは言う。「反対側を見てごらん」

「っひ」

左目の奥に映っていたのは。

私ではなく、見覚えのある尖った屋根。

私を殺す青い屋根の、容赦のない鋭角だった。

「イヴ、サヨナラ」

ああ、それが夢の中に入るときの呪文なのだなど、私は知った。

## 猫の召喚

暗く冷たい質感がお尻から伝わってくる。

背もたれのある、固い椅子だ。金縁に、赤い絨毯。ぺたりと乾いた、安っぽい絨毯が、私のお尻を冷たくなせる。

裸ではない。紺色のブレザーにチェック柄のスカート。学校の制服だ。

ここは何処だろう。

赤い絨毯が部屋の中央から十字に分岐して、左右と正面の扉まで続いている。いや、もっと先まで続いているのかもしれない。両開きで落ちついた色調の扉はどれも閉められている。金色の取っ手は重そうだ。どんな音を立てて開くのか、想像もつかない。

聖堂ほどもある高い天井はガラス張りで、月光がシンシンと降り注いでいる。まあるい月だ。まるでシオの瞳みたいと思ってから、すぐに打ち消す。月はとても綺麗だけど、濁りの塊でできているから。

「シオ」

彼の名を呼ぶ私の声は、固そうな白い壁にはじき返されるだけだった。

「いないの、シオ」

いや、きっと彼はいるはずだ。ここに存在するはずだ。その気になれば、シオが入り込めない場所なんてないのだから。

きっと、大丈夫。

一人きりじゃない。

玉座から飛び降りて、ふわりと絨毯の上に降り立つ。今日は最初から重力があるのだと思う。いつもは、空の上から始まる。今日は、屋根の上に登らなければ、たぶん、死なない。

シオを探そう。

部屋の中をうろつくうちに、玉座の背が鏡になっていることに気付く。なんとも言えない、暗い顔をした私が映っている。驚いた。こんなに苦しげな、当てつけがましい顔をしていたのかな。今日はシオもいるし、いつもより、ずっと楽しいはずなのに。につこりと、笑ってみる。

けれど私の作り笑いは思い出せないくらい昔からブサイクで。写真に写る私なんて全部偽者。消えてしまえばいい。アルバムは全て燃やしてしまった。私の写真が一枚もないアルバムなら、きつと手元におけるのに。

私は部屋を歩き回る。絨毯からはみ出すと、ローファーと大理石の床がこすれあって、キュッキュと音を立てる。滑らかだ。人は滑らかなものが好きだ。猫の毛皮を撫でる感触。そう言えば、飼い猫のミケは元気だろうか。ある日家から姿を消して、もう一年も会っていない。けれど彼女がどんなに遠くまで行っても、首輪を誰かに取ってもらっても、彼女が私の飼い猫であることに変わりはない。私が心でそう思って、誰にも言わなければ、そうなるのだ。

いつだったろうと、キュッキュと音を鳴らしながら、考える。シオと飼い猫の話をしたことがある。

たぶん、寒い夜の、自販機の傍。私は塾の帰りに家に帰りたくなくなって、何かが起こるまで待っていていようと、路肩で塀にもたれていたので。

そしたら、シオが塀の上を歩いてやってきた。

「見てもらえないな」と目を細めていた。

「飼い猫の話しようよ」と私は言った。

「いいよ。ミケの話だね」とシオは言った。

私は彼が好きだけれど、たぶん、話が通じるから好きなんだろうと思う。とても貴重な。千人に一人の　いいえ、私が今までに出会った中で一人の、逸材。

「ミケはね」と私は言った。「何をしても私の飼い猫であることが

ら逃れられないの。私が許してあげないと、自由になれないの」

「なるほど」とシオは塀の上に座って言った。「これは、話すには向かない話題だな」

「どうして？」

「君は自分の言ってることの意味がわかっているから。僕が反論しても、せつかくの嘘が壊れてしまっただけだ」

「あ、今のひどい」

「ごめん」とシオは笑った。「わかった。嘘であることは忘れて、本当の話をしよう。君は、ミケの飼い主だ」

「うん」

「ミケはどんなにもがいても、君の膝の上から逃れることはできない」

「西遊記ね」

「うん。西遊記だ。紫電の猿と紅の豚と群青の河童。そしてまっさらな人間」

「どうして悟空は苦しむの？」

「あのわっかは、害のあるものじゃないんだ」とシオは言う。「ただ御釈迦様の手のひらを、思い出させているだけなんだよ」

「そんなに簡単な魔法だったのか。」

私の脳みそのもつれが一つほどけた。

「西遊記を読むたび、あるいは猫を飼うたびに、僕たちは思い出さずにはいられない」

「もし、もし私がミケ＝悟空だったら」と、私は震えをかみ殺して言った。「どうすればいいんだろう。だって、どうしようもないことが、予めわかっているんだよ」

「そうだ」とシオは目を細めた。「いろんな種類の努力がある。身体を鍛えても、頭を鍛えても、どうにもならないことがある。見ないふりをして、人は死ぬし、縛られる。見ないふりしても、お腹が空く。眠くもなる。やらしい気持ちになって、みじめなことをする」

「シオ」私は驚いて彼を見つめた。「あなた、ミケなの？」

「いいや、僕は悟空さ」とシオは笑う。「そのうちね、君を食べようと思ってる」

「食べちゃダメだよ」と私は言うが、本当にダメなのかどうか、よくわからない。案外、かじられたら幸せになっってしまうかもしれない。

「食べちゃダメ」

「君がどんなに抵抗しても、君は僕に食べられる」

「私をミケにするの？」

「共食いだね」とシオは笑った。「動物だから死ぬのか、死ぬから動物なのか。鶏卵だ」

嫌だと、私は思った。

シオと私の間にだけは、そんな関係があってはならない。

「そうだ。そんな関係が全てではない」とシオは頷く。「いくら身体を鍛えても、いくら頭を鍛えても、どうにもならないことがある。だから人は編み出したんだ。虚実を織り交せて、身体と頭を組み込んで魂と成し、それを以って事物にふれる。神聖な墮落や、淫靡な神聖を」

「魂って……」

「僕らの全てだ」とシオは夜空を見上げて言った。

「動物でも死でもない部分のことだ。例えば今ここで話している君と、僕のことだ。僕にとっては、僕の中の君も含まれる」

「魂……」

「幻と実体の区別が意味を失くすところに魔法がある。イヴ、僕は身体も強くないし、頭も良くない。けれど僕は魔法使いだ。そのことを君は知っている。だから君と僕の間には、動物と死と魔法があるんだ」

私はシオの言っていることを頭では理解できなかった。けれど胸のつかえはとれて、また歩き出せそうな気がしてきた。

魂。

空隙。

そうだ。私が空っぽだったところで。真空は人を引き寄せる。

「ねえ、シオ」と私は彼のズボンをひつかいた。

「ミケは私から逃げられるかな」

「もし動物が魔法を使えるのなら」とシオは笑った。

「それはもう、ただの動物じゃないね」

「なら、なあに？」

「魔物だよ」

大人しく。

玉座に座って、シオを待つ。

それもいいけど、退屈なのだし、そもそも私は月曜日を明るく楽しくするためにここに来たのだから。

足掻いてみるのもいいかもしれない。

「ねえミケ」

絨毯の裏がもこもここと盛り上がる。キュッキュと爪の擦れる音。

たまらない。抱きしめて撫でまわしてやりたい。愛欲は性欲とは違うということ、猫の存在が証明している。

猫はそのためにこの世界に生まれたのだ。

「ミケ、あなたはまだ、私の飼い猫？」

「ふあーあ。……いいえ、レディ」

絨毯から抜け出したミケは、大儀そうにあくびをしてから、私のことをレディと呼んだ。

「まあ、あなたがどう思おうとあなたの自由ですがね。私に訂正する権利はない。けれどあなたにだって、私が一匹の独立した猫だっことを咎める権利はありやせんよ。どんなに餌をくれたって、優しく撫でてくれたって、ね。猫を飼うってなあ見返りを求めない崇

高な行為なんです。媚びで生きてるいぬところたあ訳が違う」

「おいで、ミケ。撫でてあげるわ」

「やれやれ、私の話をまるで聴いてやがらねえ」と、ミケは人間みたいに首を振った。

でも私が指をくねくねさせてスカートの上を示すと、のそのそとこつちに歩いてきた。

「ま、しょうがねえ。猫と人間で話しが通じる方がどうかしてらあね。見たところ、この部屋の中で一番柔らげえのはレディの太ももの上だつてんだから。世知辛い世の中だ」

ミケはするりと私のスカートの上に飛び乗った。

その黒い背を撫でると、尻尾をパタパタと動かして、黄色い目で私を見つめた。

ミケの見た目は混じりっけなしの黒猫だ。

「ミケってのは、どうもしっくりこないねえ」

「でもそれがあなたの名前なのよ？」と私は言った。「毛並みなんかに縛られることはないわ」

ミケは私の、猫一匹説得できない未熟な魔法を黙殺して、膝の上で丸くなってしまった。

あ、しまった。

これじゃ、シオを探しに動けない。

## 楽隊八二ワの闖入

猫を撫でているうちに、だんだん眠くなってきた。けれど眠ることもできなかつた。倦怠の正体は煩悶だ。やりたいことがあるのに動けない。どうしてだろう。自分でもよくわからない。 やりた  
いことは、本当は、やりたくないことなのだろうか。私はシオを探しに行きたくない。扉を開けたくない。だから猫を撫でている。それだけのことなのだろうか。

「ねえミケ」

「何です」

「変な喋り方ね」

「そうでしょうかね」

ミケはふてくされたようにぐったりと四肢を投げ出している。

「どうしてそんな、変な喋り方をするの？」

「同じになりたくないからやね」

「変な喋り方をすれば、同じにならずに済むの？」

「私はそう思いやす」

「なら、自分になりたい人と同じように喋れば、同じようになれるかしら」

「シオのように喋ってみたらどうです？」

私はシオのように話そうとして、彼がどのように話していたのか、はっきりとしたイメージを掴んでいないことに気がついた。

おかしいな。

あんなにたくさん話をしたのに。言葉の端々はたくさん覚えてい  
るのに。

「あ……えっと……」

ぱくぱくと口を動かしていると、やがてミケが呆れたようにこう

言った。

「で、いつまでこうしてるつもりなんですかい？」

「シオが」と私は言った。「シオが迎えに来るまで、こうしているわ」

「あなたがそうしたいのならそうすりゃいいと思いやすがね、レデイ」ミケは四肢を伸ばしてごろりと仰向けになる。私はその柔らかなお腹に手を伸ばして、ひたすらに撫でる。

「あの取っ手、猫じゃ開けられないんでね。レデイに開けてもらえると助かるんですが」

私は扉に目をやった。金色の取っ手。まるいわつかはすべすべだ。この距離からでも取っ手の模様が確認できるなんて、夢の中の私はとても目がいいらしい。まぶたを閉じて、光を使わずに物を見ているからだろう。

「お外に出たいの？」

「退屈なんでね」

「めんどくさいわ」

「私だつて頼みたくて頼んでるんじゃないんで」とミケは言った。

「自分で扉が開けられたらどんなにいいかわからない。でもね、この爪じゃ何かを掴むことはできないんでさあ。せいぜい、一生懸命抑えつけないことしかできねえ。そんでもって、抑えつけている間になんとかするしかない。不便な身体だ。その上レデイの言い分が私と食い違っているのは不幸だ。私が外に出るためには、どうにかしてレデイの意志を変えなくちゃならない」

「どうすれば私は動けるようになるかしら」と、私はミケに聞いた。「勘違いしないでね。私は、動きたくなくてここにいろんじやないの。動こうと思ってるのに、動けないの。だから私をその気にさせることはできないわ。だってもうなってるんですもの」

ミケはしばらく両手を狭い額に交互にこすりつけて考え込んでいたが、やがて静かにこう言った。

「ひっかきやしょう」

「嫌よ、痛いのは」私はミケの額を親指でこすった。「考えなおして」

「結果は同じでさあね」とミケは言った。「いくら考えても、猫が人間にできることは高が知れてる。鳴くか、じゃれつくか、ひっかくか」

「なら、じゃれついて欲しいわ」

「じゃれつけば、扉を開けてくれるんですかね？」

「……わからない」

約束を守らなければという義務が、どれほど私に強制力を与えるものだろうか。なにせこれは、夢の中だ。ほっぺたをつねってしまえば、醒めてしまう世界のことなのだ。

「ミケがひっかいたら、私は夢から醒めてしまいかもしれない。そしたらあなただって消えるわ、ミケ」

「消えてみるのもいい」

「ダメよ、シオが来るんだから」

「なら、脅してみやしようか。ひっかかれなくなければ扉を開ける」嫌に決まっているでしょう」

不意に、ミケの尻尾をつかんで振り回したくなった。猫はそうすると背骨が伸びて死ぬらしい。どうせひっかかれるぐらいなら、殺してしまった方がいいかもしれない。

うん、そうしよう。

どうせ夢の中なのだし。

殺してしまおう。

と思うが、手を伸ばしても殺せない。

扉が開けられないのと同じだ。

やっぱりおかしい。今の殺意はけっこう強い衝動だったはずなのに。

どうしてやりたいことができないのだろう。

「ひよっとして、何かの魔法にかけられたりしたのかしら」

「さあね……ん？」

ミケはピンと耳を立てて、起き上がって背筋を伸ばした。

「何か来る」

私も耳を澄ませてみた。

しばらくすると、遠くからかすかに太鼓の音が聞こえてくる。

タタ、タタ、タツタカター、タタ。

やがて二重奏に。

多々、多々、多多過多、多多。

三重奏に、四重奏に。ざっざっざっざと、小さな足音がたくさんする。

雑雑雑雑、多又多多又多多。

チキチキ稚気稚気、ぺたぺた下手下手。

泥泥どろろろろ、轟轟多。

お尻のあたりから、響いてくる。

「玉座の裏の鏡の中からね」と私は気付く。

「そんなところに抜け穴が！」ミケは耳を立てて一目散に私のスカートから駆け降り、背もたれの裏へと走っていった。

途端に、ギヤアギヤアうわうわと甲高い悲鳴が聞こえる。人なのだろうか。立ち上がって、確認したい。ミケを追いかけて、また手の中に抱きたい。

なのに立てない。

だんだん怖くなってきた。

私の身体、いったいどうしてしまったの？

やがてミケがとぼとぼと戻ってくる。

口にひよろりとした棒を咥えている。

点のような目と口のついたハニワが、ポッキーみたいに首元まで赤い軍服を着こんで、別れていない脚には、鉄の棘が生えた靴を履いている。

「なあにそれ？」

「鏡の中から出てきやがった」とミケは言った。

「まだ一杯いやすぜ。　　ったく、頭をぶつけちまったじゃねえか」

どうやらミケは、鏡にぶつかれば、鏡の向こう側に出ていけるのだと思っただけらしい。

妥当な推測だが、どうやら鏡は向こう側からこちら側への一方通行だったらしい。妙なハニワたちがここを目指し、太鼓を叩いて進んでいたのだ。

多多、多多、タタタタタタ、多多。

また行進曲が再開される。

玉座の両脇からハニワたちが二列に並んでまっすぐに進む。小さな太鼓とバチは宙に浮かび、それぞれのハニワの前で正確にリズムを刻む。

ハニワたちは雄々しい声で歌い始める。

あるろうたけた助産婦が

昼の宴で言うことには

英雄生まれし腹の中

きらきら光っているそう

えいえいおうおうえいおうおう

おうおうえいえいおうえいえい

あるしなびれたくそばばあ

昼の宴で言い返す

愚物生まれし腹の中

さぞぎとぎととしていよう

えいえいおうおうえいおうおう

おうおうえいえいおうえいえい

あるおめでたい王さまが

昼の宴で言うことには

私が生まれた腹の中  
狭苦しくて蹴ったとき

えいえいおうおうえいおうえい  
おうおうえいおうえいおうえい

「ぜんたあい、とまれえ！」

ミケに啜えられていたハニワが威勢よく声を上げた。ハニワが大  
口を開けるなんて、おかしなこともあるものだ。

ハニワの四列縦隊は、カーペットの上に等間隔で整列し、いつせ  
いに動きをピタリと止めた。太鼓とバチも同様に、直角に体制を整  
えて、タタとも音を出さなくなった。

「ミケ」と私は言った。「隊長を放してあげなさいな」

「ま、食えたもんじゃなさそうですな」

ミケがハニワを放り出すと、隊長は四列縦隊の前にピタリと止ま  
って、唇のない口を動かしてこう言った。

「お姫さま、お初にお目にかかります」

どうやら私はお姫さまなのだなど、私は頷いた。

そうか、それで何もできなかったのに違いない。

「初めまして」と私は言った。「あなた方はどなた？」

「我々は」と隊長が脚を踏み鳴らした。「軍楽隊であります。名前  
はまだありません」

「軍楽隊……って何？」

「軍の中において、音楽を担当する一隊のことです」

ふうん、そのままだ。訊いた私が悪いのか、答えるハニワが悪い  
のか。

どうしてそんなものが私の夢の中に居るのだろう。

「とりあえず」と私は言った。

「休め」

ハニワたちは絨毯の上に無秩序に転がった。「ああ疲れた」「猫は怖いな」「帰りたいなあ」「寒いなあ」「ここどこ」「知らない」「あの子は」「王さま」「姫さま?」「どうでもいいな」「俺たちは?」「知らない」「とりあえず、休めって言われたから休んどこう」「そうだそうだ」

「気をつけ!」

ハニワたちは音もなくスツと行列に戻り、また一言も話さなくなつた。

「ご命令を!」と隊長が言う。よく見ると、隊長の軍服の襟にだけ金色の勲章がついている。

「ミケ、どうしようかな」

「私は寝る」と言つて、ミケは私のスカートの上で丸くなってしまった。

「ご命令を、お姫さま!」と隊長は繰り返す。

私はだんだん腹が立ってきた。

シオを探さないといけないのに?

ううん。

それは嘘。

いつもみたいに早く迎えに来てよ、シオ。

## フェイスィズの因数分解

中点に月がある。世界は球。内側に向けて生えている。

シオはルーペで部分部分を拡大しながら、七つの鏡を宙に浮かべて四方八方を見渡していた。

地平は十二の巨大な顔で構成されている。天には若い女の無機質な顔。地には口をへ字に曲げた道化の顔。東西南北にはそれぞれ怒りを浮かべた鬼が、その中間にはバラバラに引きちぎられた女四人分の顔が散らばっている。耳の隣には口。おわんを逆さにしたような頭、髪の毛のような岩石の稜線。

表面は何処も木々や岩盤で覆われている。目には湖、口には海。波が立っている。世界はゆっくりと回転をして、風も吹く。

「模倣か」

夢の世界でも物理法則は機能する。現実世界の影、あるいは発想の限界。無意識ですら、意識しなければ現実は越えられない。あるがままを受け入れた最大限に自然な姿で、夢は影として続いていく。「さて、どうして顔に囲まれているのやら」

夢の分析は難しい。百という数字が全て一からできていると分析するのは簡単だ。二だけの数列でも、五だけの数列でも表現できる。だが、そんなことをしても何の意味もない。

視線と濁った月。動いている世界と、止まっている表情。動いているのに動けない。近くで見ても掴めない。

「僕にできることは、稜線を示すことだけか」

一つの誤謬を選ぶのは本人でなければならぬ。どんな魔法もいずれば解ける。解けた後に何も残らないのが魔法というものだ。だからこそ、選んだという事実が必要になる。

「僕はどうしたいのだろう。彼女を笑わせたいのだろうか。それとも、ただ欲しいだけだろうか」

シオは世界を眺めまわしながら、独り言を言う。けれどそれは、

イヴにも聞こえてはいるはずの独り言だった。

「好意はもちろんあるが、自分の欲望の中身となると僕もさっぱりだ。いずれ君が僕の夢の中に入ってくれるなら、これ以上のことはないんだけど」

そのためには、イヴを魔法使いに仕立てなければならぬ。

けれどシオは自分の中身を知らない。自分以外の魔法使いなど見たこともない。故に、イヴの中身をどのように変えれば彼女が魔法を使えるようになるのかがわからない。

けれど推測はついている。

世界で最も不自然な場所を探せばいいのだ。

「迷う危険はあるが、サイズを変えるか」

シオは飛んできた楕円の鏡を掴みとり、内側に手を突っ込んだ。

とぶりと肩まで沈みこむ。引き上げると、手の中には桃色の小ピ  
ンが握られていた。

「アリスの加護を」

一息で煽る。

シオの全身が光り、輪郭がぼろぼろと崩れていく。数百に崩れた肉片の一つ一つが、月面にふれるたびにポロンと音を立てて蛍に変わる。

蛍の群れは名残惜しげに濁った月を一回りすると、十九の群れに分かれて、十二の群れは世界を司る十二の顔にヒュンと飛び去り、七つの群れはそれぞれの鏡の向こう側にとぶとぶと潜り込む。

後に残ったのは宙空に浮かぶ七つの鏡と濁った月。

青い屋根の城は、何処にある？

## 横断歩道

机の脚に張り付いた黒い埃の塊を見て、私は夢から醒めていることに気付いた。指で目やんを確認しながら周りを見まわす。ほとんど真っ暗だ。時計を見るともう六時を回っている。部活門限は六時半まで。そろそろ校舎には鍵がかかけられつつある。

シオの姿はない。

腹が立った。

私をおいて何処に行ってしまったのだろうか。

それとも、今も私の夢の中をさ迷っているのだろうか。

家に帰って、今度はベッドで長い睡眠を取るう。続きから夢が見れるのかわからないが、あんな夢の続きなんて見たくない。

私は自分の脚を、ぶらぶらと交互に揺らす。ちゃんと動く。それはとても幸せなことだと思った。あのままそこにいたら、もう二度と立てないかもしれなかった。

「……不自由だわ」

初秋の風は生ぬるい。ローファーに履きかえた私は、いろんな音を聞かないようにしながら、シオの気配に集中した。彼が来るときはいつも不自然な風が吹く。髪の中や袖をやらしくなぞっていく。彼は私を抱きたいのだ。私はなんだかそれが辛い。

石ころを蹴って夕暮れの坂を下りながら、何故辛いのかを考える。だって私はふさわしくないのだ。うまく呼吸もできないし、ちゃんと魔法を使えない。自分でもよく分からない魔力じみたものが、内側から噴き出てきて、何かを変えることはたまにある。そこにありそうにないものを見ては、怖気づいてしまって、きちんと確かめようとしてもしない。

シオのことだって。

本当は、何も知らない。

このまま二度とシオには会えないかもなんて、別れ際にはいつも思う。

「でもきつと、だいじょうぶ」

シオは私の中に入ると言った。彼は嘘つきではない。ましてや、私をただ悲しませて軽蔑させるだけの、くだらない嘘なんかつかないはずだ。

「みい」

自販機の傍、黒猫が塀の上に乗って鳴いている。この猫はミケに似ている。でもほんの少し顔の輪郭が違う。ミケはもつとふてぶてしい丸顔だ。きつと偽物のその猫は、偽物のくせに、私を見つめて逃げようとはしない。

抱き上げると、ふてぶてしくひつついて、ぐったりとしている。

「疲れてるのね、あなた」

「みい」

黒猫はかすれた声で返事をする。

「なら、あなたはミケってことにしときましょう。ミケはあなたよりも元気だから、あなただって元気になれるかもしれないわ。ね、あなたがミケじゃなければ、私は魔法を使っていることになるのよ。言葉の通じないあなたには、効果がないかもしれないけれど」

「みい」

タタタタ、多々多々。

ドンドコ鈍何処。てらてらてられて

テロテロテロテロ、多多、ドンド。

下手くそな太鼓の音が四つ角の右手から聞こえてくる。空気が濃いとこころじゃこんなにも情けないのね、あのはにわたち。

でもしょうがないことなのだ。だってにはわは土に埋まっている。彼らが土に埋まっていると、いろんな人が死ななくて済む。くだら

ないことのために死ななくて済む。

ただの土の塊なのに。

「はにわを作ったのも、きつと魔法使いなのね」

四列縦隊の行進が空気の中を切り裂いて、靴を地面に突き立てて、通りの中を突き抜ける。ざっざっざっざ。演奏が下手なのではなくて、私の耳がおかしいのかもしれない。あんなにも行進はしっかりしていて、車が来てもみじろぎもしない。この世界の何もかも、彼らの行進を妨げることはできない。

やがて隊長が身体を少し傾けて立ち止まる。隊員たちは彼に倣って、私に向かつて、バチを使って敬礼した。

「ご命令を、お姫さま」

「歌を歌って、はにわさん」

愛する人を奪われて

さよならだけが人生で

積もった雪にうずもれて

卵を温め続けてさ

やっと孵ったその卵

私のもものじゃなかったと

積もった雪におしこんで

上に座ってみたってさ

はにわと歩く行進は楽しい。他の誰にも見えていない。私が考えていることは誰にも伝わらない。私は私が考えているだけのものになればいいのと思う。写真に写ったり、話しかけられたりしなければ、私はきつと明るく楽しく生きれるはずだ。

ほじくりだしたその赤子

冷たくなつたその身体  
誰も何も言つたりしない  
赤子を見ても言つたりしない

楽しかつた日々はうそ  
私の頭は灰にうずもれ  
身体の中は腐つてる  
飲んだ覚えはないのにな

冷たくなつたその赤子、温めてあげようなんて  
思つた覚えはないのにな

信号の点滅する横断歩道を、はにわたちを引きつれて渡っていく。  
なんだか自分がいつもよりしゃんとしているように思えてくる。誰  
もはにわたちを見つめない。黒猫だつて見えていないかもしれない。  
何かを抱きかかえているような、変なポーズで歩いている女の子。  
くすくす笑つて、頭の弱い女の子。

少しだけ、明るく楽しくなつてきた。これもきつとシオのおかげ  
だ。きつと彼は今も私の中に居て、いろいろと調べ回つて、ほじく  
り返しているに違いない。かわいそうなシオ。あなたはまるで私の  
はにわね。ねえどうして、私のためにそんな汚い場所に行かなけれ  
ばならなかつたのかしら。

ねえ、シオ。ダメね、シオ。  
現実のありとあらゆるものの中で、思考こそがまさに最悪。  
深く考えると、あなたのことすら嫌いになりそう。

「その猫、どうしたの？」と母が訊く。  
「ミケ、帰ってきたみたい」と私は言う。  
「そんなわけないでしょ」と母は気味悪がつて言う。「ミケは死ん

「だでしょ」

母が何を考えているのか。私には常日頃から理解ができない。そんなことは言われるまでもなくわかっていて。まさか私が死を理解していないとも思っているの？

「でも、この猫は私に懐いているし。お腹を空かせているみたい。少しだけめんどろをみてあげたいの」

「ダメよ、ミケはもう死んだでしょ。その猫は元のところに返してきなさい」

なんて話の通じない。

母とはにわは台所で、お互いを無視したかのように私を挟んで対峙している。

後ろにいるはにわが見えるかなんて訊いたら、きつと母は怖がるだろう。

「ねえはにわ隊長」と私は猫を撫でながら言う。「いじわるなお母さんね。一発叩いてさしあげなさい」

「了解しました！」とはにわ隊長は号令をかける。「全体突撃！全員で、一発ずつ、殴れ！」

はにわたちはわらわらと母にとりついて、棘のある靴でかわるがわるに踏みつける。私は黒猫を脇の下から抱えて、母の鼻先にもつていく。黒猫は私の命令なんてききもしないであくびをする。

「わかったわ」と母は言う。

「でも、少しの間だけよ」

「え？」

私は驚いて、猫を取りおとしてしまった。スタンと床に降り立った猫は、恨みがマシそうに私を見上げて「みい」と鳴く。

「いいの」母が前言をひるがえすなんて、思いもしなかったわ、私。「いいわよ」と母は言う。笑いもせず、怒りもせず。

自分の部屋に戻った私は、白いシートの上に倒れ込んで、はにわたちが整列するのを待った。狭い部屋の中ははにわで埋め尽くされ

て、黒猫は私の腕の中でぐったりしている。うんざりだとも言い  
たげに、部屋を見まわして「みい」と鳴く。

「驚いたわ」と私は言った。

「あなたたち、役に立つのね」

「当然です」とはにわ隊長は言う。

「効いていないように見えても、案外効いている。それが音楽とい  
うものの力なのです」

ああ、シオ。

今日は早く寝て、早くあなたに会いに行くわ。

こんなに明るく楽しい月曜日は初めてよ。

## 乾いた世界

再び、夢の中。

玉座に座った私は、どうにかして立ち上がるために、ミケにひっかいてもらうことにした。

「ちよっぴりよ。それ以上痛くしたら、はにわ隊長に踏みつけてもらうんだから」

「肉食獣が土くれに負けるわきゃあないと思いやすがね。ま、やってみましょうか」

ミケは私が水平に伸ばした小手を、カリカリと可愛い仕草でひっかく。

「痛い」

「立てやすか？」

「まだダメね」

「そんなら」

ミケは私が止める間もなく、小手に鋭い爪を深く差し込んだ。

「痛い！」

私はミケを振り払って、バランスを崩した。玉座の背にミケが潜りこむのが見える。

今度は背中をひっかく気なのだ。

私はぐっと背をそった拍子に、玉座から転げ落ちてしまった。

ミケは嬉しそうにみゃっみゃと鳴いて、玉座の上で丸くなる。

ぶるんと震える二つの丸い血の塊をふーふーと吹く。やっぱりミケは殺さないとダメだな。それが、爪を全部抜きとって、無抵抗に撫でられる生き物にしないとダメだ。

「あなた、そこに座ったら立てないってこと、わかってる？」

ミケは目を丸くして尻尾を揺らした。

だが、立ち上がるうとはしない。

「しまった……」

「ふふ、いい気味ね。私のことをひっかいたからだわ」

「あなたがひっ搔けと言ったんだ、レディ」ミケは不満そうに言った。

「私を置いていこうって言うんですかい？」

「そうね……。もう二度とひっかかないって約束してくれるなら、いいわ」

「約束しやしよう」とミケは二つ返事で頷く。「元々あなたをひっかく気はないんだ、レディ。あなたの体温が愛しいだけで」

「夢の中の約束よ？ 本当に守れる？」

「レディ」とミケはうつぶせに低く伏せる。「あなたは二つ勘違いをしている」

「ご命令を！」とはにわ隊長が思いだしたように叫ぶ。「ご命令を、王子さま！」

「王子さま？」私は驚いてはにわ隊長を見つめる。「私は女よ？」

「お前は誰だ」とはにわ隊長は靴を踏み鳴らす。「王子さまの御前だ！ 無礼だぞ！」

「無礼だ」「無礼だ」「非礼だ」「非礼だ」と、はにわたしが口々にわめき始める。

「黙れ」とミケが一言言うと、みんなして黙る。

「一つは、約束はいつも夢の中で行われるということ。もう一つは、ここは痛みを感じる程度には現実だったことですよ」

ミケの言うことはもっともだが、それよりもはにわ隊長の態度の方が気になった。

「はにわさん、あなたたち、ひょっとして、あの椅子に座っていらっしゃってもいいの？」

「それは違う」とはにわ隊長は言った。「あの玉座に座れるほどのものならば、誰であろうとすばらしいのだ！」

「誰でも座れるのよ？」と私が言っても、「違う」「違う」と聞く

耳をもたない。

「レディ」とミケが退屈そうにごろごろしながら言う。「早く私を抱き上げて」

「ご命令を！」とはにわ隊長がその言葉を遮った。大口を開けたその中には、なまめかしくて長い舌がある。あの舌でどんなフルートでも吹き鳴らすに違いない。もしここにフルートがあれば、さぞ楽しかったことだろうに。

「では命令しよう」とミケが言う。「互いが互いを壊せ。残った方は他のまだ動いている奴を壊せ。自分以外誰も動けなくなるまで続ける。最後の一人だけ隊長として生かしてやる」

はにわたちの反応は様々だった。言われるままに他のはにわを叩くもの。怯えて何もしないもの。やられたときだけやり返すもの。叩けば叩かれ、叩かれれば叩く。

次々とぼろぼろの土片が赤いカーペットの上に散らばっていく。私は止めようとしたが、止められなかった。鉄の棘が生えた靴がとても恐ろしく思えた。今の私はお姫さまではない。何を言っても無駄だし、ひよっとしたらまた痛い目を見るかもしれない。

ここはその程度には現実なのだ。

やがて、自分がやられたときだけやりかえしていたはにわが一体、ぼろぼろになりながらも生き残った。

「よくやった」

「横暴だ」とはにわは言った。「お前のせいだ。くだらない命令を出しやがって！」

「なんで命令を守ったんだ」とミケは楽しくもなさそうに言った。

「バカが。お前らの間の物語になんて、何の価値もない。さあレディ、私を担ぎあげてくれ。そしたらあいつはここに座るだろう。そしたらこの部屋からおさらばだ」

「それは命令？」

「そうさ、レディ。あなたが命令に従うかは、あなたが決めればいい

い

「そうね」と私は頷く。「あなたが私をひっかかないなら、連れていくわ。あなたもあつたかくて気持ちいいものね」

「だから、ひっかく気はないんですよ、レディ」

私はミケを抱きかかえた。

はにわは私と玉座を交互に見てしばらく迷っていたが、私が左の扉から出ようとすると、「待ってください」と後ろから言った。

「ご命令を、お姫さま」

「あら、私なの？」驚いた。

「今は」トンとはにわは太鼓を叩いた。

「座ろうとしない人なら、誰でもいい気分なんです」

その後。

シオの話によると、蘇ったはにわ隊長が玉座に座り、蘇ったはにわたちは玉座の前に整列して、命令を待っていたそうだ。

「ご命令を！ 王さま！」

はにわ隊長は何日も何日も命令を考え続けて、やがてぽつりとこつと言った。

「私のことは隊長と呼べ」

彼らは彼らだけで、何処かへ行けるようになったらしい。

どうかフルートのある場所に行きますようにと、願ってやまない。彼らがふさわしい場所にいないから、私の歌はいつまで経ってもへたっぴなのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2498q/>

---

月光城の魔法演義

2011年2月2日16時25分発行